

曹洞俳壇

選・村松五灰子

湯豆腐の出番をせかす片手酌

茨城県 藤井 一夫

評 乾燥した筑波風吹くころともなれば何と言つても、お酒のあてには体の温まる湯豆腐がうれしい。すでに酌み始めては居るが待つ身には長い。左党の心情を離れず滑稽味も含ませ描いている。

傍線の若き日の夢曝書せり

神奈川県 小野沢邦彦

評 夏の虫干しである。若い日に愛用した辞書や愛読書である。その中のところどころの傍線は青年の血を沸かせたものである。その中には幾つも潰えたものも、又なし得た事も。過ぎし日々の思い出を胸内に思う。

◆秋深し夫も目薬さしをりぬ 神奈川県 小橋 幸

◆まなかひの給餌台から寒施行 北海道 堺 隆

◆サファリンに日本の秋を探しけり 静岡県 堤 千春

◆煌めくは銀河のしづく湖千里 岩手県 鈴木 道昭

◆確実に石段のぼる七五三 東京都 野村 信廣

◆国体や芋たき添へておもてなし 愛媛県 能仁めぐみ

◆聞き流すこととみに増ゆ木の葉髪 北海道 大野 節子

◆神無月何時まで続く雨の神 静岡県 富岡 一郎

◆雑踏の明るき声や冬の市 青森県 中田 瑞穂

◆空稲架に暮色深まる通夜の径 千葉県 鈴木 英子

*選者吟

薄氷や我が背に被る影一つ

五灰子

*作句小見

三番目の句、お連れ合いも、やはりさしている目薬。微笑ましくそこに年月のゆとりが。寒施行までもってペットの餌台より。大戦後ソ連領に、ご先祖はそこに眠っておられるのだろうか。

人々の暮らしの俳句に人生の投影をしみじみ感じます。

曹洞歌壇

選・長澤 ちづ

落日はさに稲架の垂れ穂がかがやきぬ遠く声して渡るかりがね
岩手県 穴戸さとる

評 刈り取った稲を架けて乾かすための設備を稲架という。稲架に掛けられた垂れ穂に夕日が映える光景に加え、雁のわたる声が遠く聞こえると大きく景をとらえ、秋の実りの豊かさを伝えて余すところがない。

風ありて散る山茶花よ風なくて散る山茶花
よ冬の余白に
東京都 長谷川 瞳

評 山茶花はよく似た花の椿と違って、はらはらと花びらが散る。その繊細な散り方を有り無し風の風に託して美しい。結句の収め方にも詩心を感じる。

◆飯館の田畑に人ら立つごとく泡立草がはびこりて咲く
福島県 大槻 弘

◆雪虫の舞うこともなく霰こぼりふる冬の扉が突然開き
北海道 田中 祥晃

◆正月に子らの来る当てなしといふ棚の大鍋あくびしてゐる
秋田県 小田篤恭

◆突堤の灯台隠す高浪に舫見回る漁師の姿
岩手県 関合 新一

◆数分の遅れ気にせぬ日々なれど動かぬ時計の電池交換
静岡県 高尾 善五

◆田沢湖に映る紅葉をゆらしつつスワンのボートはスピード上げて
秋田県 石川 京

◆三代の親孫揃いて庭の面に落ちし毬栗拾いて楽し
北海道 吉田 洋子

◆父の書の般若心経入門書しんしん雪降る日々に読み居り
北海道 菊地 和子

◆白き白き富士ヶ嶺とう山茶花の一輪咲けり台風の朝
大阪府 高畑 良圓

◆引き売りの婆の手ほどきぬた鱒二合徳利を酌み合う二人
新潟県 星野 三興

*選者詠

たたなわる雲の色濃きひとところ見えざる
山の在り処示して
ちづ

*作歌小見

雪虫が飛ぶと雪が近いことから冬の到来の予告となる雪虫、それをまだ見ないのに雪まじりの雨が降ると詠う田中さん。北海道の長い冬が想われる重い扉です。花の名を生かした高畑さんや、皆さまの力詠を楽しみつつ拝見しました。



大本山永平寺



涅槃会ねはんえ

二月の永平寺は、一段と寒さを増し、私たちの背筋を伸ばしてくれませす。

さて、永平寺では毎年二月に、お釈迦さまをお偲しのびするご供養のおつとめを致します。はつどう法堂の東側に、大きな涅槃図をかけてお経をお唱えするのです。

涅槃図には沢山のお弟子さま方や、動物たちが描かれております。涅槃図の周りに座して読経をしておりますと、涅槃図と法堂がひとつづきになって、そこにいるものが皆共にお釈迦さまをお囲みしているようです。

私たちが、それぞれに大切なあの人を、手を合わせ、あるいは胸に手をあてたりして思う時に、時間や場所を超えて、その方のお姿が浮かんだり、声が聞こえてくる場合があります。

日々に手を合わせ、大切なあの人と共に生きる生活をしていまして、例えば悪いことをしようとする時には、「やめて！」とか、「本当にそれでいいのか?」と、聞こえないはずの声が聞こえてくるように思います。

私たちは、礼拝らいはいやご供養を通して、日日にお釈迦さまの生きたお姿をわが身に温め、お釈迦さまと共に修行しているのです。



大本山總持寺



節分追儺式と涅槃會

寒の入りから約一カ月間、鶴見の街に鈴の音を響かせ読経しながら周っていた「寒行托鉢」が一月末で終了しました。

二月三日には一足早く春を呼び込む「節分追儺式」が大祖堂で盛大に行われ、有名人や年男・年女など二〇〇〇人を超える人々が福をいただきに訪れます。

最初に江川禅師さまが大導師で御祈祷法要が勤められます。威勢のよい太鼓で般若心経が唱えられ、大般若経を転読して東日本大震災被災地の復興や人々の無病息災・心願成就を祈拝いたします。

法要が終わると禅師さまの「福はうち」の発声で堂内一斉に豆がまかれ、たちまち堂内は賑やかな歓声と熱気に包まれます。豆まきの後は有名人たちによる福引抽選会が行われます。

また、十五日はお釈迦さまのご命日「釈尊涅槃會」です。

この日、總持寺では大きな涅槃図を掲げて色とりどりの涅槃団子をお供えし、禅師さま御親修で「涅槃會法要」が行われます。また、十二日から十四日までは「報恩摂心」が修されます。

これらが終わると、總持寺での修行に一定の節目をつけそれぞれの出身地に帰る雲水の姿が見られ、この時節の風物詩です。

そして入れ替わるように新しい雲水が道を求めて続々と上山してくるのです。